

オリエンタリズムの問題 (1982/1992)¹

バーナード・ルイス

山形浩生訳 hiyori13@alum.mit.edu

Executive Summary

欧米におけるアラブ研究の大家バーナード・ルイスが、サイド『オリエンタリズム』についての苦言をまとめた論説。

- ギリシャ人が、古典研究はギリシャを貶め支配する西洋の陰謀だと言い始めたら、バカげていると思うよね。でもサイド『オリエンタリズム』一派の主張はまさにそれと同じ。
- ヨーロッパのイスラム/アラブ研究は、イスラム帝国に脅かされていたときの防衛策が起源。だから「オリエンタリズム/東洋研究」がアラブ支配のツール、という見方はそもそも変。
- ヨーロッパのアラブ研究では、ドイツの貢献が最大。でもドイツはアラブ圏侵略をほぼ行っていない。ここからも「オリエンタリズムはアラブ侵略のツール」というのがウソなのは明らか。サイドはそれをごまかすため「ドイツは何の貢献もしていない」とウソをついている。
- 事実関係のまちがいがあまりに多すぎていい加減だし性的妄想は異常なほど。
- 研究者への批判も、その実際の研究は無視して言葉尻をとらえた勝手な妄想で、その判断基準は政治信条やイデオロギーだけ。学問的に無意味。
- 現代についても「アラブ研究はすべて欧米主導でアラブ自体による研究がない」と見下すが、そんなのいくらでもある。
- 結局、欧米の素人たちの反米イデオロギーで珍重されているだけ。本当の専門家や、擁護しているはずのアラブ圏ですらまったく評価されていない。

訳者注：この論説は 1982 年に *The New York Times Review of Books* に掲載されたが、1992 年の単行本 *Islam and the West* 収録時にかなりの修正加筆が行われている。その変更履歴を以下のように示した：

1982 年版にはあったが単行本収録時に削除された部分：緑色

1992 年単行本収録時に加筆された部分：茶色

¹ Bernard Lewis, "The Question of Orientalism," *Islam and the West*, Oxford University Press, 1993, pp.99-118. 初出は *The New York Times Review of Books*, 1982 年 6 月 24 日、pp.49-56.

<https://www.nybooks.com/articles/1982/06/24/the-question-of-orientalism/?pagination=false>

ただし書籍収録版にかなりの加筆修正あり。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

ギリシャの愛国者や過激派の集団が、古典研究という専門分野はヘラスの偉大な遺産に対する侮辱であり、それに取り組む「古典学者」なる輩は、根深い邪悪な陰謀の最新の表れなのだ、と言いだした状況を想像して欲しい。その陰謀は何世紀にもわたって胎動してきたもので、西欧で生まれ、アメリカで花開いたものだという。そしてその狙いは、ギリシャの成果を貶めて、ギリシャの土地と人々を隷属させることなのだそうだ。この観点からすると、古典研究というヨーロッパの伝統はすべて——おおむねフランスのロマン主義者、イギリス植民地(もちろんキプロス)の知事たち、詩人たち、教授たち、両国からの植民地総督たちが創りだしたもの——はヘラスの長い伝統と一体性に対する長期的な侮辱なのだという。この毒はヨーロッパからアメリカに広がった。そこでは、大学におけるギリシャ史やギリシャ語、ギリシャ文学の指導は邪悪な古典学者の一味に支配されている——そいつらはギリシャ出身でもないし、ギリシャの大義にまったく肩入れせず、客観的な学術というインチキな仮面の下で、ギリシャ人を永続的な従属状態に置こうと頑張っているのだ、という。

いまこそ、ギリシャを古典学者どもの手から救い出し、古典研究という有害な伝統をすべて終わらせるときなのだ。はるか古代から今日までギリシャ史やギリシャ文化について教え、論じられるのはギリシャ人だけだ。ギリシャ人だけがこうした分野における学術研究を導き、実施するだけのまともな能力をもちあわせているのだ。一部の非ギリシャ人も、この偉大な活動に参加が許されるかもしれないが、そのためには納得できる形でその能力を示す必要がある。たとえば、キプロスにおけるギリシャの大義を応援し、トルコ人に対する敵意を実証して店、現在支配しているギリシャの神々に焼香してみせ、ギリシャの知的サークルで目下ファッションナブルなイデオロギーを何でもいいから採用して見せることだ。

こうした要件を満たさない非ギリシャ人たちは、明らかに敵対的なのであり、従って公平かつまともな形でギリシャ学を教えられる能力がないのである。そいつらが古典主義の仮面の下に隠れるのを許してはならず、その正体を暴いてやらねばならない——トルコ愛好者、ギリシャ人の敵にして収奪者、ギリシャの大義に敵対する連中というのがその正体なのだ。すでに学界で地位を確立している連中は、手段を選ばず貶めて引きずり下ろし、無力化しなければならない。同時に、大学センターやギリシャ研究関連学文に対し、ギリシャや親ギリシャ的な支配を確保し、一種の学術的な予防措置を通じて、これ以上の古典学者や古典研究の登場を阻止しなければならない。その一方で、古典学者という名前そのものを、一種の罵倒語に変えねばならない。

古典研究とギリシャという形にすると、この図式はバカげて見える。だが古典学者のかわりに「東洋学者/オリエンタリスト」という言葉を入れて、それにあわせてあちこち変えると、この荒唐無稽なおとぎ話が恐ろしい現実となる。ここ数年にわたり、アメリカの大学や

多少は劣るがヨーロッパの大学で、東洋学者/オリエンタリストに対する糾弾の声があがっており、「オリエンタリズム/東洋研究」という用語はかつての意味合いを完全に捨てられ、まったく新しい意味を与えられている——東洋の人々に対する好意的でない敵対的な扱い、という意味だ。それを言うなら「好意的でない」「敵対的」という言葉ですら定義が変えられてしまい、目下ファッショナブルな信条や大義を支持しない、という意味にされてしまった。

たとえばV・S・ナイポールの例を考えよう。彼はイスラム諸国を旅行して、それについて見事な記述を著した人物だ。ナイポール氏は教授ではなく小説家だ——現代で最も才能豊かな小説家の一人だ。ヨーロッパ人ではなく、インド西部出身の西インド人だ。現代イスラムについての彼の著書は、学術研究書ではないし、また研究書だというふりもしない。人間性の専門的な観察者による、詳細な観察の結果だ。たまにまちがっていることもあるが、おおむね残酷なほど正確だし、何よりも共感にあふれている。ナイポール氏は人間行動のバカげた面を捕らえる目を持っており、これは相手がイスラムの土地だろうと他のところだろうと変わらない。同時に彼は、その愚行ぶりを実に忠実に描いてみせる。彼は人々の抱えている怒りや苦しみの双方に対する、深い共感と理解に動かされているのだ。

だがこうした共感も、政治的、イデオロギー的な遺恨を抱えた人々にはまったく評価されないどころか、認識すらされない。ナイポール氏は彼らの主張の旗を振ってみせない。イスラムの急進派指導者たちを賞賛することもなく、その人たちが反対している連中の蛮行を糾弾することもない。従って、彼はオリエンタリストなのだ——洗脳されたとはいえもう少し分別を持つべき大学生たちですら、ナイポール氏にオリエンタリストのレッテルを平気で貼りつける。

だが彼らの頭の混乱ぶりは、有名大学の教授が行う「オリエンタリズム」の講義が、ひたすらオリエンタリストの学術研究に対する罵倒、それに携わる者たちの邪悪視に費やされる状況では無理もないものだろう。そしてその講義の最後にはこう語られる。「そしてここで、皆さんにもう一つ言っておかねばならないことがある。ここにすら、この大学にすら、オリエンタリストたちがいるのだ」——そしてこの「オリエンタリスト」という用語は、Orientalistsの最後の音節のts(ツ)を発音するときの、歯を食いしばるような怒りと共に吐き出されることになる。

ばかばかしさが絶頂に達したのは『ニューヨーク・タイムズ』への投書だった²。その著者はある主要大学で、「歴史と中東研究の博士号候補者」だと言う。カーゾン卿とそのイランについての好意的な言及に対する抗議として書かれたこの手紙の作者は、カーゾン卿を

² *New York Times*, 1986年12月20日

ルイス「オリエンタリズムの問題」

「英オリエンタリスト思想のまさに象徴」だと述べ、彼が「その存命中ですらイラン人たちや西洋の民主派たちに、同国民の悲劇的な運命の主要な責任を負う存在と見なされていた」という。この手紙の著者はさらに E・G・ブラウンについて、その 1910 年の著書『ペルシャ革命』が「まったくちがった種類の本だ」と述べる。その中でブラウンは「革命の成果について」語っており、カーゾン卿の邪悪な役割についても明らかにしているから、という。

カーゾン卿がイギリスの帝国主義的な意図を断固として擁護したことは疑問の余地がないし、ブラウン教授が反帝国主義、親イラン的な立場を持っていたのもまちがいないことだ。だがどう考えても奇妙なのは、カーゾン卿（彼はその長く活発な政治的、帝國的なキャリアの中でインド総督となり、後に外務大臣にもなった）が「英オリエンタリズム思想のまさに象徴」とされるのに、ケンブリッジ大学でアラビア語教授を務め、当時のイギリスやヨーロッパにおける東洋学者/オリエンタリストの筆頭格だった E・G・ブラウンが、その反オリエンタリズムと称する物のために賞賛されているということだ。侯爵も碩学の教授もまちがいでなく、この言われようには驚いたことだろう。ここまで勝手極まる言葉の扱いの前例を見つけるには、ハンプティ・ダンプティにまで立ち戻らねばならないだろう。ハンプティ・ダンプティはご存じの通り、『のめや歌えや』を『これであんたはこの議論で完全に言い負かされた』という意味で使うことに反論されたとき、「わたしがことばを使うときには、ことばはわたしの選んだ通りの意味になるのである——それ以上でも以下でもない」とのたまった。この「オリエンタリズム」という用語の使い方は、明らかに言語の歪曲だ。だがこれは悲しいかな、正確でもある。というのもこれは、いまや普及してしまった真実の歪曲を反映したものだからだ。

ならば、オリエンタリズムとは何だろうか？ あまりに多くのこれまで有用だった単語を、理性的な言説で使えないものにしてしまった、あの現代の知的汚染により毒される以前に、この単語はどんな意味だったのだろうか？ かつてオリエンタリズムは主に二つの意味で使われていた。一つは絵画の一派だ——中東や北アフリカを訪れて、自分たちの見たものや想像したものを、とくにはいささかロマンチックで派手な形で、ときにはポルノ的すらある形で描きだした、主に西欧出身の画家たちによる絵画だ。二つ目のもっと一般的な意味は、最初の意味とはまったく関係なく、学術研究の一派だった。この用語とそれがあらず学術分野は、ルネサンス以降における西欧での学術研究の大幅な拡大以来の歴史を持つ。ギリシャ語を研究するヘレニスト、ラテン語を研究するラテニスト、ヘブライ語を研究するヘブライストたちがいた。この最初の二つはときに古典研究者と呼ばれ、最後のものがオリエンタリストと呼ばれた。そしてやがて、彼らは他の言語にも目を向けるようになった。

要するに、こうした初期の学者たちは文献学者で、文献の発見、研究、刊行、解釈を行っていた。これは哲学、神学、文学、歴史学といった他の問題の真剣な研究が可能になる前に

行う必要がある、最初の最も本質的な作業だ。「オリエンタリスト」という用語は当時、現在思われているような漠然とした曖昧なものではなかった。神学は非キリスト教宗教には不適切と考えられたので、この用語はたった一つの学問分野、文献学にだけ適用されることになった。初期段階では地域は一つしかなかった。現在中東と我々が呼ぶ地域だ——これはヨーロッパ人がまともに知っているとは主張できる、オリエントの唯一の部分なのだ。

有史最初期以来、ヨーロッパは東の近隣地域を、ときに恐怖をもって、ときに貪欲をもって、ときには好奇心を持って、そして時には不安をもって眺めてきた。何世紀にもわたり、いや実に千年にもわたり、両者の関係は征服と再征服、攻撃と反撃のパターンを示してきた。ペルシャの大王たちはギリシャ都市国家を脅かして侵略した。だが今度は逆にアレキサンダー大王に侵略された。アラブはシリアとパレスチナ、エジプトと北アフリカ、シチリア、スペイン、ポルトガルをキリスト教世界からもぎ取った。そのヨーロッパでの獲得領土はレコンキスタで失ったが、イスラム軍は残りの部分を十字軍による反撃からは守り抜いた。タタール人はロシアを征服し、オスマントルコはビザンチンからコンスタンチノープルを奪い、ウィーンまで進軍したが、その後長い退却を開始し、これを政治家や後の歴史学者たちは「東方問題」と呼んだ。そしてアラブが南西ヨーロッパから撤退してタタール人やトルコ人が東欧と南東ヨーロッパを離れるときには、その後から勝ち誇ったかつての被支配者たちが追いかけてきて、その被支配者だったヨーロッパ人のほうが、いまやかつての支配者たちのアジアやアフリカにおける故国に対し、独自のさらに広大な拡大を行うようになった。

オスマン帝国の弱さと撤退が示した問題が「東方問題」と呼ばれたのは、ほとんどのヨーロッパ人にとっての危険と侵略の源というのが、かつてのペルシャの前衛からオスマン帝国という後衛まで、すべてヨーロッパのすぐ東の地域からくるものだったからだ。これこそ「ザ・東洋」であり、それ以上の細かい定義など必要なかった。というのもそれ以外の東方地域など知られていなかったからだ。東方問題、フランス語では *la question orientale* は、ヨーロッパのすぐ隣にあるオスマン帝国がもたらす問題だった。それは当初、その強大さがもたらす脅威としての問題であり、後にはその弱さがもたらす誘惑としての問題だった。フランス語では、一般的なヨーロッパでの用法と同じく、「オリエント」「オリエンタル」という言葉が適用される地域は、地中海の東部から始まる。アメリカの用法では、それは古代および中世のヨーロッパがほとんど知らないか、まったく存在すら知らなかったずっと遠い地域に適用される用語となった。

古代ギリシャ人にとって、アジアというのはエーゲ海で自分たちの対岸部のことだった。その背後にもっと広大で遠いアジアが広がっているのに気がついたとき、彼らはその目先の隣国を小アジアと呼んだ。同様にして、もっと京大で、異質で、豊かで、遠くにある東洋がヨーロッパ人の関心を惹きはじめると、やがて彼らは古い馴染みある近隣の東洋につい

ルイス「オリエンタリズムの問題」

て「近東」「中東」と呼ぶようになり、その彼方にあるものと区別するようになった。ポルトガルとオランダ、イギリスとフランスは競い合って喜望峰をまわり、おとぎ話に聞いたインドや東南アジアの国々にたどりついた。中にはさらに遠くの中国や日本に到達した者すらいた。ヨーロッパ商人がそこから持ち帰った財は西洋の経済や社会習慣を一変させた。学者や宣教師たちが持ち帰った文献を、文献学者たちはラテン語やギリシャ語、ヘブライ語に對して発達させたのと同じ手法を使って検討するようになった。

探検と学術研究の進歩にともない、「東洋学者/オリエンタリスト」という用語はますます不満足なものとなつた。オリエンタリズム/東洋の学徒はもはや、単一の学問分野に携わるのではなく、複数の分野に展開していった。同時に彼らが研究している地域、通称オリエンタリズム/東洋は、それまでヨーロッパの関心が集中していた中東地域をはるかに超えて広がるものに見なされるようになり、インドや中国というはるかに広大かつ遠方にある文明も含むようになった。こうした研究にたずさわる学者や大学学部では、もっと厳密なラベルを使おうとする傾向が出てきた。学者たちは、東洋関連の文献学者や歴史学者と名乗るようになった。そしてこうした話題と関係して、彼らはシナ学者やインド学者、イラン研究者、アラブ研究者 (Arabist) といった用語を使って、自分たちの研究する地域や分野について、もっとしっかりした具体的な定義をするようになった。

ちなみに、最後に挙げた名称「アラブ学者」もまた意味改変プロセスを経ている。かつてイギリスでは、アラブ学者という用語はイラン学者やスペイン学者 (ヒスパニスト) やドイツ学者と同じ形で使われるのが通例だった——ある特定の地域や人々の言語、歴史、文化を専門に扱う学者を示す用語だ。アメリカでは、それは特に政府や商業においてアラブ人と交渉するときの専門家を意味するようになった。全員ではないが一部の人々にとって、これはアラブの大義を支持する人々を指す。これまた言語汚染の一例であり、おかげで必要な用語が使えないようになってしまった。ヒスパニストという用語は、中米の独裁者やテロリストの擁護者ということではないし、闘牛愛好家のことでもないし、スペイン問題の観察者や実務家ということでもないし、バナナマニアということでもない。それはスペイン語系の知識を豊富に持っている学者ということ、スペインまたはラテンアメリカの歴史や文化について、何らかの分野を専門にしている人、ということだ。アラブ学者も同じように使われるべきだ。だがこれはおそらく、もう取り返しがつかないことで、何か別の用語を見つけるしかないのだろう。中国研究者 (シノロジスト) やインド研究者 (Indologist) トルコ研究者 (Turcologist) に倣ってアラブ研究者 (Arabologist) を使おうという人すらいる。この用語は精度面では優れているかもしれないが、エレガンスはかなり劣る。真に偉大な文明の研究に携わる、決して無価値ではない学者集団は、もう少しいいレッテルをもらってもいいはずだ。

「オリエンタリスト」という用語もいまや救いがたいほど汚染されてしまったが、この用語がすでに価値を失っており、かつてはそれを名乗っていた人々ですら実のところとっくに放棄していたので、あまり重要ではない。この放棄が正式に表現されたのは、1973年夏にパリで開催された第29回東洋学国際会議においてだった。これは同じ年で開催された第一回東洋学国際会議の百周年記念であり、この会議の性質と機能を再検討する好機とされたのだ。やがて、このレッテル放棄を支持するコンセンサスがあるのは明らかとなった——中にはさらに話を進めて、この一連の会議そのものを終わらせたがる人もいた。東洋学という専門分野自体が存在しなくなったから、この会議ももはや存在意義を失った、というのだ。制度機関が存続したがるという普通の意志のおかげで、会議の解散は避けられた。だがオリエンタリスト/東洋学者という用語を廃止しようという運動は成功した。

攻撃は二方面からやってきた。一方は、これまで東洋学者/オリエンタリストと呼ばれてきたが、自分が携わる分野も、対象とする地域も示していない用語にますます不満を抱くようになってきた人々だった。これは、インドの歴史や文化を研究するインド人に、東洋学者などという用語を適用するのはバカげていると指摘した、アジア諸国の学者たちからも賛成を受けていた。さらに彼らは、この用語が研究の参加者ではなく研究対象のように思わせるので、この用語がなにやら東洋人に対して侮辱的だという主張も付け加えた。

古い用語を維持すべきだという最も強い主張は、ソ連代表団からきた。その団長の故バジャン・ガフロフは、モスクワ東洋学研究所所長であり彼自身もタジキスタン共和国出身のソ連東洋人だった。ガフロフは、この用語が一世紀以上にわたり有益な貢献をしてくれたのだし、なぜ我々の仕事を便利に示してくれる単語を捨てて、何世代にもさかのぼる我々の先生やそのさらなる師匠たちが誇りを持って掲げてきた旗印を放棄せねばならないのか、という、ガフロフは、その発言を保守的な観点の立派な表明だと賞賛したイギリス代表のコメントにも不満そうだった。投票では、ソ連代表団を東欧の東洋学者たちが支持したのにガフロフは敗北し、オリエンタリスト/東洋学者という用語は正式に廃止された。代わりにこの会議は「アジア北アフリカ人文学国際会議」を名乗ることで合意した。表現としてははるかに容認しやすいものだが、電報を送るときには長ったらしくなってしまうし、フランスの学術用語に馴染みが深い人々なら人文科学というのが人文学に影響を受けた社会科学のことだということを知っている人は抵抗を感じたかもしれない。

こうしてオリエンタリスト/東洋学者という用語はお墨付きを持つオリエンタリストたちにより廃止され、歴史のゴミの山に投げ込まれた。だがゴミの山は安全な場所ではない。「オリエンタリスト/東洋学者」と「オリエンタリズム/東洋学」という用語は、役立たずだとして学者たちに捨てられたのに、回収されて再整備され、論争的な罵倒用語という別の使途にまわされることになったのだった。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

実はオリエンタリスト/東洋学者に対する攻撃は、イスラム世界では決して目新しいものではなかった。以前も何回かのフェーズを経ており、それぞれの場合にちがった利害や動機が作用していた。戦後期に最初にそれが登場したのは、奇妙な発端からだ。これは『イスラム百科事典』第2版の編集開始という、イスラム研究の分野での一大プロジェクトと関係していた。初版は三カ国語——英、仏、独語——で同時刊行され、これらを含め多くの国の学者たちが参加した。その編纂には三十年近くかかり、完成したのは1938年だった。第2版は1950年に編纂が開始され、英語とフランス語だけで刊行され、国際編集委員会にはドイツ人はいなかった。

イスラムからの攻撃は、新生のパキスタンイスラム共和国の首都カラチから登場したものだ。その論点は二つ。ドイツ語版がなく、ドイツ人の編集委員がいないこと、そして編集委員会にフランス系ユダヤ人故E・レヴィ＝プロヴァンシャルがいたことだ。この最初の論点が先にきていること、というかこれが存在すること自体が、カラチではいささか奇妙に思われたが、やがてこの抗議を組織した人物が「西パキスタンドイツ系ムスリム集会のイマーム」と名乗る人物で、それが復興途上のドイツから着任したばかりの外交官に多少の支援を受けていたことがわかって放棄された³。これはまだ第三帝国の心構えが完全には消えていない時期だったのだ。

この出来事はほんの一時的なもので、イスラム世界の他の地域では、ほとんど何の反響も引き起こさなかった。その後もオリエンタリスト/東洋学者に対しては、他にもいくつか攻撃が生じたが、そのほとんどは起源がかなり地域限定のものとなっていた。そこでは、イスラム的なものとアラブ的なものという二つの主題が大きく採り上げられていた。自分自身とその敵を宗教的な枠組みだけで定義する人々にとって、オリエンタリズム/東洋学はイスラム信仰への攻撃とされた。1960年代初頭に、エジプトのアル＝アズハル大学の教授がオリエンタリストと彼らの邪悪な行いに関するちょっとした論説を著した⁴。オリエンタリスト/東洋学者たちは、主に宣教師で、その目的はキリスト教の至高性を確立するために、イスラムを貶めて最終的には潰すことなのだ、とのこと。これはそのほとんどについてあてはまるが、例外はユダヤ系の東洋学者で、彼らの狙いもまた同じく邪悪なものだという。著者はイスラムを攻撃する東洋学者の一覧を挙げ、その邪悪な影響に反撃する必要があるのだと述べる。さらに特に警戒を要する、本当に悪質で危険な学者たちの一

³ パキスタンのマスコミ、1955年の春と夏、特に *Morning News* (カラチ), August 24, 1955 の社説とニュースコラム、およびこのキャンペーンに抗議する *Pakistan Times*, September 1 と September 28, 1955 掲載の Sh. Inayatullah の手紙2通。

⁴ Muhammad al-Bahi, *Al-Mubashshirun wa'l-Mustashriqun wa-mawqifuhum min al-Islam* (Cairo, n.d., ca. 1962).

覧を別に並べている——その連中は一見すると、善意をこれ見よがしに掲げてくるのだそう
うだ。

この一覧の中には、プリンストン大学の故フィリップ・ヒッティも含まれている。この
小冊子の著者は、ヒッティについてこう述べる。

レバノン出身のキリスト教徒 (中略) イスラムの敵の中でも問題の多い人物であ
り、アメリカでアラブの大義を擁護するふりをして、中東問題についてアメリカ国
務省に対する非公式の顧問となっている。

彼は常に人間文明の創造におけるイスラムの役割を矮小化し、イスラム教徒に何
一つ優れた点を認めがらない (中略) 彼の『アラブの歴史』はイスラムへの攻撃
だらけで、預言者をせせら笑ってみせる。そのすべてが悪意と害毒と憎悪であり(後
略)

故フィリップ・ヒッティはアラブの大義の揺るぎない擁護者であり、彼の『アラブの歴
史』はアラブの栄光の賛歌だ。それがこんな言われ方をするのは、彼としてもショックだ
ただろう。この手の、オリエンタリスト/東洋学者が宣教師で、一種のキリスト教の第
五柱だという宗教的な文句は、パキスタンや最近ではイランでも登場している。

東洋学/オリエンタリズムに対する執拗なイスラム系批判者たちが、イスラムについて
のキリスト教やユダヤ系の著者を、宗教的な論争や改宗活動の実践者だと見るのは、わか
らなくもない——実際、彼らの前提からすると、その結論はほぼ逃れがたいものになる。
彼らから見ると、ある宗教の信者は必然的にその宗教の擁護者であり、それが別の宗教に
アプローチするのは、改宗候補者でもない限り、防衛か攻撃目的でしかあり得ないことにな
る。伝統的なイスラム学者は、キリスト教やユダヤ教の思想や歴史を研究したりはしな
いのが通例だったから、キリスト教徒やユダヤ教徒がイスラム教を研究するまともな理由
が思いつかないのだ。実際、イスラム統治の下でキリスト教徒やユダヤ教徒が己の信仰の
実践を許される規則ディンマの規定の一つは、彼らが子供にコーランを教えるのを禁止し
ている。中世キリスト教徒も似たような見方を持っていた。彼らがイスラムとイスラム聖
典を研究しはじめたのは、キリスト教徒のイスラム改宗を防ぎ、イスラム教徒のキリスト
教採用を促進するという二重の目的をもってのことだった。このアプローチは、キリスト
教世界では、いくつか宗教的な狂信の出店を除けばとっくの昔に放棄されている。イスラ
ム世界では、それがはるかに長いこと、宗教同士の関係における主流の見方として続いて
いた。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

一部のアラブ著者の中では、別のアプローチも見られる。これはナショナリズムとイデオロギー的用語の組み合わせとして表明されている。不思議なことに、これに携わる人々のほとんどは、アラブ諸国における少数派のキリスト教徒の一員であり、しかもその本人が西欧やアメリカで暮らしているのだ。その好例がパリ在住のコプト教社会学者アヌール・アブデル＝マレクによる、カイロの小冊子刊行の一年ほど後の1963年にUNESCO機関誌『ディオゲネス』掲載の論文だ。この論説は「東洋学（オリエンタリズム）の危機」と題されており、東洋学者/オリエンタリスト糾弾の主要な論点となるものをいくつか提示している。東洋学者は「ヨーロッパ中心主義」であり、アフリカアジア系著者の学者、研究、手法、業績に十分な注意を払っていない。過去にこだわり、「東洋」の人々の最近の歴史への関心が不十分である（もっと最近の批判者は正反対の主張をしている）。社会科学、特にマルクス主義的な手法がもたらす洞察への関心が足りない。

アブデル＝マレク博士の論説は、明らかに情熱的に書かれている。そしてそれは、熱烈な主張の表明となっているのだがそれは、学術論争の範囲内におさまるものであり、東洋学者/オリエンタリストの著作についての、好意的ではないにせよ慎重な研究に基づいているのは明らかだ。彼は、東洋学/オリエンタリズムが決して本質的に邪悪なわけではないかもしれない、一部の東洋学者自身もその被害者なのかもしれないという譲歩を見せる用意さえ持っている。

新しい主題の予兆が登場したのはバイルートの雑誌が1974年6月に出した論説だ。それを書いたのは、アメリカの大学で教鞭を執る教授だった。いくつか引用を示すと、その方向性がわかるだろう。

[アメリカにおける]アラブ研究のシオニスト学者による覇権は、研究、雑誌、さらに専門学会の統制に明らかな影響を及ぼしてきた。こうした[シオニスト学者たち]は大量の本や研究を刊行し、何も知らない人々はそれを見て、純粋に科学的なものだと思ってしまうが、実はそれはアラブの歴史や現実を歪曲するもので、アラブの解放闘争の足を引っ張るものだ。彼らは科学的なふりをするので、アメリカやイスラエルの公安機関のスパイやエージェントを送りこむ。彼らの任務はアラブ国家全域においてフィールド研究を行うことだ。(中略) こうした驚異的な事実、アラブ当局が一部のアメリカ教授の行う正当で正直な研究と、アメリカの公安と覇権を動機とする学徒や教授たちの行うものとを区別したいなら留意すべきものである。アラブ当局は、アラブの富がアメリカやイスラエルの利益を支援するのを許してはならない。物質的、精神的支援の求めをすべて慎重かつ正直に検討すべきである。アラブの資金が、アラブの弱体化、侮辱、劣化に使われるなど決して許しては

ならない⁵。

これは重要な文であり、その後の中東研究における学術展開の政治学を理解するにあたり、大きな助けとなるだろう。

「東洋学者/オリエンタリスト」に対する別の攻撃は、マルクス主義者の一団からのものだ。彼らの論争はいくつか奇妙な点がある。一つは、あらゆるオリエンタリスト/東洋学者が依拠する、オリエンタリスト思想や路線があるという思いこみだ——東洋学者たちの著作にほんのわずかでも馴染みがあれば、そんな幻想はすぐに消え去るはずなのだが。こうした批判者自身は、ほとんどがオリエンタリストではない。これは別に、彼らがオリエンタリストのドクトリンや正統教義を拒絶しているという意味ではない。そんなものは存在しないからだ。これは彼らがオリエンタリスト/東洋学者の技能を持っていないということだ。これはマルクス主義の東洋学者だろうと、非マルクス主義の東洋学者だろうと、まったく同じ形で実践される技能なのだ。中東史に関する真面目なマルクス主義著作のほとんどは、自分も東洋学者であるマルクス主義者たち（彼らは非マルクス主義の同僚たちと同じ手法や規律に基づいて訓練を受けている）によるものか、あるいは分析や結論に根拠として東洋学者たちの著作（マルクス主義者も非マルクス主義者も含む）に頼る著者たちによるものとなっている。

その好例がペリー・アンダーソンの知的な書物『絶対国家の系譜』だ。興味深く思索に満ちてはいるが、中東問題やイスラム問題全般についての扱いはすべて、二次情報源、つまりはオリエンタリスト/東洋学者たちの成果に頼っている。他のやり方はあり得ない——もちろん学者たちが、必要な技能を身につけて一次情報源を読むという絶望的な手間をかけるというなら話は別だが。だがこれはむずかしいし時間もかかるうえ、当の学者たち自身がオリエンタリズムの糾弾にさらされるという追加の欠点も持っている。フランスのマクシム・ロダンソンやロシアのI・P・ペトルシェフスキーは中東史に大きな貢献をしており、その成果は彼らのイデオロギー的な信念や政治的な方向性に賛同しない者たちにすら受け入れられている。その彼らも自分たちの仕事では、他の学術分野に携わるマルクス主義者仲間よりは、同輩たる東洋学者たちにはるかに大きな敬意を示している。いまのところ、西洋の反オリエンタリストたちは、アラブ史に独自の貢献をしようという試みをほとんど示していない。そしてそれを試みた場合にも、その結果はあまり感心できるものではない。

⁵ Ibrahim Abu-Lughod, "Al-Sayatra al-Sahyuniyya 'ala al-dirasat al-'arabryya fi Amrika," *Al-Adab*, Beirut, vol. 12, no. 6 (June 1974) 5-6.

ルイス「オリエンタリズムの問題」

現代のアメリカにおける反オリエンタリズムの旗手はエドワード・サイードだ。その著書『オリエンタリズム』は1978年に最初に刊行され、大量の書評、論説、公式発言の山によって賞賛された。これはあるテーゼを持った本だ——「オリエンタリズムは英仏とオリエントとが経験した固有の近接性から生じたものだ。このオリエントという言葉は、19世紀初頭までは、インドと聖書の地だけを意味するものだった」(p. 4)。この論点を証明するため、サイード氏は数々のきわめて恣意的な決断をする。彼のオリエントは中東だけに限られ、しかもその中東というのはアラブ世界の部分だけに縮小される。トルコ研究やペルシャ研究を排除し、また一方ではユダヤ研究を排除することで、彼はアラブ研究を、歴史的・文献学的な文脈から切り離してしまう。オリエンタリズムの時代も地域も同様に狭められてしまう。

自分の主張を証明するため、サイード氏はオリエンタリズム台頭を、18世紀末に設定して、その主要な中心地は英仏にする必要が生じた。だが実は、オリエンタリズム/東洋研究はすでに17世紀には確立していた——たとえばケンブリッジ大学におけるアラビア学の学長職は1633年に創設されている——そしてその中心地はドイツとその周辺国だった。実際、ヨーロッパのアラビア研究史でドイツを抜かしているというのは、ヨーロッパの音楽史や哲学史にドイツが含まれないのと同じくらい筋が通らない。

サイード氏はなんとかこの手口を正当化しようとする。

私はオリエントについてのイギリス、フランス、アメリカの著作は、その品質、一貫性、分量だけで見ても、ドイツやイタリア、ロシアなどで行われた、確かに重要にはちがいない研究よりも上だと信じている。だが東洋(オリエント)学術研究の主要なステップは、まずイギリスかフランスで実施され、ドイツ人はそれを入念にしたのもまちがいないと考える。(中略)ドイツの東洋学が行ったのは、大英帝国とフランス帝国がオリエントからほぼ文字通りかき集めた文献、神話、思想、言語への適用について技法を洗練させ入念にすることだった。(訳注：最後の文は文法的にかなり変)[Pp. 17-18; p. 19]

この最後の文はまったく意味不明だ。手稿やその他の書かれた資料という意味でのテキストは、確かに西洋の訪問者によって中東で集められた。だがドイツ、オーストリアなどの収集も、「大英帝国やフランス帝国」によるものと同じ位重要なのだ。そもそも言語を、文学的なものだろうとそうでなかろうと、どうやって「かき集める」というのか？ここでの含意は、アラビア語を学ぶことで、英仏人たちがなにやらよからぬことをしていた、というものらしい。ドイツ人——事後共犯者——は英仏が最初にそれを奪ってくるまでは、こうした言語に対して「洗練させ入念にする」作業を始められなかったという。そ

うした言語、および神話や思想が不適切に奪われた（というのがどういう意味か知らないが）アラブ人たちは、このようにして剥奪されてしまった、というわけだ。

この一節は単にまちがっているだけでなく、バカげている。これは、学者が何をするものか、学術研究がどういう活動かについて、不穏なまでの無知をあらわにしている。読者の不安は、絶え間ないどぎつさを増す一方の同義語が頻繁に持ち出されることで、さらにかきたてられてしまう。「収奪」「貯め込む」「むしり取る」「篡奪する」果ては「強姦する」などという言葉が、東洋についての西洋における知識の増大を表すのに使われる。どうもサイド氏にとって、学術研究や科学というのは、有限量しか存在しない財らしい。西洋は他の資源と同様に、こうしたものについても不当な量を奪い、おかげで東洋は貧しくなっただけでなく、非学術的で非科学的になってしまったとでも言うようだ。こんな前代未聞の知識理論を体現するだけでなく、サイド氏はその彼が悪魔じみた描き方をするオリエンタリストたちよりも悪質な、現代アラブの学術的業績に対する軽視を表明しているわけだ。

反オリエンタリズムは基本的には認識論だ——『オックスフォード英語辞典』の表現では「知識の根拠や手法の理論や科学」を扱っている。この意味でそれは、事実を扱うべきものであり、おとぎ話や創作を扱うものではない、と思うのが普通だろう。サイド氏の『オリエンタリズム』で最も首を傾げる特徴はまさに、彼が根拠にしていると称する事実を扱うときの、きわめて高圧的で創作的な、特異なやり方だ。彼の見方では、オリエンタリストは帝国主義者の諜報員であり手先であり、知識に対して関心を示すのはそれが権力の源だからだ。アラブ学者は、兵士や貿易商や帝国の公務員と同じく、共通の目的を持っている。貫き、従属させ、支配し、収奪することだという。この見方を支えるため、サイド氏は英仏におけるアラブ研究の拡大、アラブ地域における英仏の権力増大と、その両者のつながりについて、歴史修正主義的な見方を提示する。

初めて『オリエンタリズム』を読んだとき、その語り口の基調——無数の参考文献や、物事のシーケンスやそれらの関係性に対するほめかし——には正直いって面食らった。サイド氏は、SF作家が大好きなあの代替宇宙の一つを考案したのだろうか？ 当時は、数世紀にもわたる知的な歴史と一般史についてのこれほどひどい扱いについて、他に説明が思いつかなかった。いくつかの誤った主張は、何ら明確な論争的な狙いを持っておらず、単にまったくの無知によるものものなのかもしれない。たとえば、イスラム軍が北アフリカを征服する前にトルコを征服した、といった信念だ (p.59)。これはイギリス内戦をノルマン人による征服の前に置くようなものだ。たぶんこれは主要な論点には関係ないだろうが、それでもイギリス史に関する著作に対するその著者の評価能力について、信頼を増すようなものとは言いがたい。同じようなアプローチが、今度は比較文献学の面でも見

ルイス「オリエンタリズムの問題」

られる。そこではドイツの哲学者フリードリッヒ・シュレーゲルが、「自らオリエンタリズムを実質的に否定した後ですら、相変わらずサンスクリットとペルシャ語、およびギリシャ語とドイツ語のほうが、ヘブライ語、中国語、アメリカ語やアフリカ系言語よりもお互いに近いと考えた」(p.98)とあって嘲笑される。サイド氏はこの見方に反対しているらしく、これをシュレーゲルのかつてのオリエンタリズムのどうしようもない名残だと考えているらしい。だがまともな文献学者なら、だれもこのシュレーゲルの見方に反対しようとはしないはずだ。

さらに驚かされるのは、サイドが自分の主張にあうように出来事を変えてしまうことだ。「イギリスとフランスは、地中海東部を17世紀末以降から支配してきた」(P.17)——つまり地中海東部を支配していたオスマントルコがちょうどオーストリアやハンガリーから退却しつつあるときで、英仏の商人や旅行者たちはスルタンの承認がないとアラブの土地を旅行できなかった時代ということだ。英仏のアラブ研究を遅らせて、ドイツ学術研究を二次的な役割に貶めるというのも、サイド氏の主張にとっては同じく不可欠なことなのだ——そして同じくウソだ。

サイド氏の代替宇宙の謎はずっと解けなかったのだが、数年後に初めてフランスの学者レイモン・シュワブの驚くべき本『東洋のルネサンス』⁶を初めて読んだことで、その謎が解けた。この本は、何も知らない書誌作成者が思い込んでしまうような、何やら極東における学問復興についての議論ではない。シュワブはフランスの詩人であり知識人で1956年に他界したが「ルネサンス」という言葉をヨーロッパにおける学問の復興という元の意味で使っている。彼の語る東洋というのは主にインドのことで、それを多少東西に拡大している。中東においては、ヨーロッパのイスラム研究については何も言っていないが、古代中東の探索については、西側の研究者によるその埋もれた記念碑の発掘や、忘れられた文書の解読、失われた言語の回復などに多少の言及をしている。

中東、もっと具体的にはイランから、シュワブの発見の軌跡はインドに向かい、さらにはその先にまで進む。彼の本は、二つの大きな関連しあった主題を扱っている。最初のものは、発見のプロセスそのものだ。シュワブは、学者たちが次々と——最初はイギリス人たちが、次いでフランス人たちが、インドを直接調べるというユニークな機会を与えられ、それから他の人々、特にドイツ人の学者たちが生涯かけてインドの言語、文化、宗教について新しい知識のコーパスを造り上げていったという、すばらしい物語を語っている。二つ目の主題は、彼の作品の文脈からするとこちらのほうが重要なのだが、このインドから

⁶ Raymond Schwab, *La Renaissance orientale* (Paris, 1950). 英訳 *Oriental Renaissance: Europe's Rediscovery of India and the East 1680–1880*, trans. Gene Patterson Black and Victor Reinking (New York, 1984) はあまりに不正確で使い物にならない。

の新しい材料がヨーロッパの知的伝統の一部になったという話だ。多くの魅力的なつながりがここから生じた。たとえばヒンドゥー教の汎神論とドイツ哲学者のつながり、サンスクリット文献学とアリア神話、仏教がエマソンやソローに与えた影響、ロマン主義復興におけるインド的な要素などだ。シュワブはすさまじい文芸教養と深い文化的な洞察により、ヨーロッパのオリエンタリスト／東洋学者たちが刊行した文献、翻訳、研究が、ゲーテやラマルティーヌ、ヴィニー、ヴァーグナー、ホイットマン、トルストイといった実に広範な作家の手元に届き、影響を与えた様子を無数の例で示してくれる。同じヨーロッパのインド学者たちはインドにもある程度の影響を与えたが、それはまた別の話だ。

『オリエンタリズム』とそこから生じる反オリエンタリズム(反東洋学)の波は、明らかにシュワブの本を読んだことで深い影響を受けているし、この本は絶賛の形で何度も参照されている。西洋におけるアラブ研究に関するサイード氏のまったく不可解な図式は、シュワブを読むとなぜ生じたのかが見えてくる。が、もちろんそれでその図式が容認できるわけではない。サイード氏は、シュワブの描いた図式を、ちがう地域にちがう魂胆をもってあてはめてみせたのだ。

この魂胆の変更は、そうした他の主張の常として、議論の余地があるものだ。だが対象地域を変えてしまったことで、その主張はまったくバカげたものとなる。ヨーロッパにおけるインド研究とイスラム研究とで話がまったくちがうのだ。インドは、ヨーロッパのどんな部分も侵略したことはないどころか、脅かす気配すら見せたことはない。西洋でのインド研究は比較的遅く生まれたもので、強力かつ拡張しているヨーロッパが、弱体化したインドが外国支配の下に陥りかけているときの産物だ。文献の収集も、確かにヨーロッパによる、南アジアや東南アジアへの商業的、そして最終的には軍事的な拡大により実現した。

これに対してヨーロッパのイスラム研究は、中世盛期に始まったもので、自分たちが征服している世界に対する関心から生じたものではない。自分たちを征服しにきている世界に対する関心から生じたものだ。中世ヨーロッパのイスラム研究に実用的な目的があったとすれば、それは攻撃ではなく防衛目的のものだ。サラセン帝国、トルコ帝国、タタール人たちに対して守勢に追いやられたキリスト教世界を防衛しなければならなかったのだ。16世紀以降のヨーロッパ拡張期には、中東への実務的な関心に奉仕するのであればアラビア語、まして古典アラビア語などに注目するよりは、トルコ語に注目するほうがいいはずだ。その当時はトルコ語こそが、モロッコから東のあらゆるアラブ諸国の統治言語だったのだから。文書資料館で研究をしている歴史学者たちなら、アルジェ、チュニス、トリポリ、まして地中海東部諸国の支配者からロンドンやパリに送られた書簡は、アラビア語ではなくオスマントルコ語で書かれているのを知っている。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

ヨーロッパとイスラム世界との関係は、その後変容したし、ある面では逆転すらした。だが、それはインドとヨーロッパの関係とは根本的にちがうものであり続けた。発見プロセスがおかれた状況はまったくちがっているし、その時間的な推移もちがうし、ヨーロッパ内での地理的な分布も、その引き金となった態度も、それがもたらした結果もちがう。肥沃な三日月地帯における英仏支配は、第一次世界大戦末から第二次世界大戦の後始末までのほんの数十年しか続かなかった。アラビア半島、エジプト、北アフリカでの支配はもう少し長続きしたが、外国支配が百年を超えたのは、アデンとアルジェリアだけだ。その支配期にあってすら、アラブ地域のほとんどでの英仏支配は委任統治や保護領といった仕組みをあいだにはさんだ間接的なものだった。その範囲、深さ、期間、長期的な影響において、イギリスのインド支配に多少なりとも匹敵するようなものはまったく存在していない。だがサイド氏は、エジプトがイギリスに「併合された」(p.35) と思っているので、アラブ世界でもインドと同じようなプロセスがあったと思い込んでいる。

この種の、暴力的な掌握と奪取という主題に性的な論調をかぶせたものは、この本で何度か登場している。「19世紀末に重要だったのは、西洋がオリエンを貫いてモノにしたかどうかではなく、むしろ英仏がどのように自分たちがそれをやったとを感じるようになったか、ということである」(p. 211)。あるいはまた；「オリエンのような弱い、または低開発地域の空間は、何やらフランスの関心と貫きと、散種——つまりは植民地化を招いているかのように見られた(中略)フランスの学者、行政官、地理学者や商業エージェントたちは、かなり受け身一方の女性的なオリエンにその放恣な活動を注ぎこんだ」(pp.219-20)。こうした性的妄想の投影の絶頂(と言うべきか)が生じるのは、サイド氏の妙技ともいべき一節で、私が古典アラビア語の辞書から引用したアラビア語の語幹についての語彙的な定義に対して、実に手の込んだ、敵対的でまったくバカげた解釈を読み取ってくれた部分だろう⁷。

⁷ 「革命」を指すイスラム圏での用語を論じるにあたり、私は——アラブでの普通のやりかたに従って——それが派生したアラビア語の語幹の基本的な意味を簡単に参照した。現代アラビア語で最も広く使われている用語を紹介したある一節は、次のようなものだ。「古典アラビア語の語幹 th-w-r は、立ち上がる(たとえばラクダに乗って)、動揺し興奮したりするという意味で、ひいては特にマグレブ用法では、反逆する、という意味となる。これはしばしば小さな独立主権領土をつくり出す、という文脈で使われる。たとえばコルドバのカリフ国解体後11世紀スペインを支配した、いわゆる党王 (party kings) などは *thuwwar* (単数形は *tha'ir*) と呼ばれる。名詞 *thawra* の最初の意味は興奮だ。たとえば標準的な中世アラビア語辞書「シハーハ」で引用されている一節 *intazir hatta taskun hadhihi 'l-thawra* (興奮が静まるまで待つ) での用法ではそうになっている——ちなみに、よいアドバイスではある。動詞形は *al-Iji* が *thawaran* または *itharat fitna* という形で、暴動を煽るという意味で使っている。これは、人が悪い統治に対する抵抗の義務の実践を止めてしまう危険の一つとして挙げられている。*Thawra* は19世紀のアラビア語の著者たちがフランス革命を指すのに使った用語であり、その後継者たちは、現代において認められた革命について、国内国外を問わず言及するときにこの用語を使っている」("Islamic Concepts of Revolution," in

サイード氏が無理矢理その対象に押しつける、時間、空間、内容の制約は、深刻な歪曲なのだが、彼の目的にとっては便利どころか不可欠なのはまちがいない。だがこれだけでは、その狙いの実現には不十分だ。彼の研究の対象だということになっている、英仏のアラビア学者やイスラム学者を見ると、多くの主要な人々(クロード・カーエン、E・レヴィ＝プロヴァンシャル、アンリ・コルバン、モールス・カナール、シャルル・ペラ、ウィリアム&ジョルジュ・マルシャス、ウィリアム・ライトなど、重要な貢献者たち)はまったく言及もされないか、あるいは片手間に名前が挙がるだけだ(R・A・ニコルソン、ギールストラングジュ、トマス・アーノルド卿、E・G・ブラウン)。参照している人々の作品ですら、サイード氏の作品選択は驚くほど恣意的だ。通常のやり口は、学術研究に対する主要な貢献は無視して、ちょっとした片手間の著作だけにこだわる、というものだ。

この一例は、彼の19世紀イギリスの学者エドワード・レーンに対する扱いに見られる。レーンは彼の現代エジプト人についての本をめぐって論じられ——そして邪悪視されている。この作品は、1830年代に彼がエジプトに滞在したときの副産物で、興味深いし多くの点で有用なものだ。だがレーンの畢生の大作、何巻にもおよぶアラビア語＝英語レキシコンに比べればどうでもいい作品だ。こちらの作品は、当時もいまもヨーロッパのオリエンタリズム/東洋研究の一大業績であり、アラビア語研究の記念碑的な業績だ。これについてはサイード氏は一言も触れない。

こうしたすべて——歴史的な背景の恣意的な並べ替え、国や人物や著作のいい加減な選択——を持ってしても、サイード氏が自分の主張を証明するには不十分なので、彼は他の

Revolution in the Middle East and Other Case Studies, edited by P.J. Vatikiotis [Rowman and Littlefield, 1972], pp. 38-39.)

この定義は、その形式も内容も、標準的な古典アラビア語辞書に従ったもので、アラビア語の語彙用法に馴染みがある人物であれば、すぐにそれとわかるはずだ。政治でラクダのイメージを使うのは、古代アラブ人にとっては自然なことだった。トルコ人にとっての馬のイメージや、西洋の海運世界で船のイメージが持つと同じ意味合いなのだ。

サイードはこの一節をまったく別の形で理解した。「ルイスが *thawra* をラクダの立ち上がり、それも一般に興奮をもった立ち上がりに関連づけているのは(そして価値観のための闘争と関連づけていないのは)、彼にとってアラブ人がほとんど神経症の性的な生き物以上のものではないことを、いつもよりもずっと広範な形で示唆している。彼が革命を表すのに使う単語や節のすべては、性的な意味が満ちている。乱れる、興奮、立ち上がる。だが彼がアラブ人に割り当てるほとんどは「悪い」性的な意味だ。結局のところ、アラブ人は真面目な行動など執れないので、その性的興奮はラクダの勃起なみの気高さしか持ち合わせていないというわけだ。革命のかわりに出てくるのは暴動、小さな独立主権領土(訳注:「小さな」は *petty* で、特に最近のアメリカ英語では「ケチな」という意味で使われることが多いため、サイードは勝手に悪い意味を読み込んでいる)の設置、さらに興奮、ということはずまりアラブ人どもは交合するどころか前戯、自慰、膣外射精しかできないと言うに等しい。ルイスは無邪気に研究者ぶってみせるし、何やらお高くとまった表現をしてみせるが、彼の含意しているのはそういうことなのだと思ふ」(pp. 315-316)。こんな物言いに対しては、ウェリントン公爵の言葉をもって答えるしかあるまい。「そんなことを信じられる君は、どんなバカげた話でも信じ込ませてしまうまことにおめでたい御仁だ」

ルイス「オリエンタリズムの問題」

手口に頼らざるを得ない。一つは、引用部分を勝手に読み替えて、著者の述べた意図とまともな形で一切対応しないものに仕立ててしまうというものだ。もう一つは「東洋学者/オリエンタリスト」という分類に、ありとあらゆる著述家をぶちこむという手口だ——シャトーブリアンやネルヴァルのような文芸作家、クローマー卿のような帝国行政官などの作品は、確かに西側の文化的な態度の形成に関係はしていただろうが、サイド氏の主要な標的である、オリエンタリズム/東洋学という学術的な伝統とはまったく関係がない。

それですら不十分なので、自分の主張を示すためにサイド氏は一連の無謀な糾弾を連発してみせる。だから 18 世紀末から 19 世紀初頭のフランスの東洋学者スロヴェストル・ド＝サシーについて語るサイド氏は「彼は東洋文書館を篡奪し（中略）自分がエリワエタ文献を持ち帰り、それを校閲した（後略）」(p. 127)。この記述に何の意味があるのかわからないが、どうもそうした文献にアクセスできたサシーが何か悪いことをしており、さらにはその文献を改ざんという犯罪を犯したのだ、と言いたいらしい。これは偉大な学者に対するとんでもない糾弾で、カケラほどの真実も含まれていない。

別の、もっと一般的な東洋学者に対する糾弾としては、彼らの「経済的な思想は、東洋が根本的に商業や取引の能力と経済的合理性を欠いているという主張から広がることはなかった。イスラム研究の分野では、このクリシェは、文字通り何百年にもわたり維持されてきた——それがやっと終わったのは、マクシム・ロダンソンの重要な研究『イスラームと資本主義』が 1966 年に登場したときだった」(p.259) というものがある。当のロダンソン自身が、この主張のばかばかしさにまっ先に気がつくだろう。これを書いた人物は、アダム・メズ、J・H・クレーマース、W・ビョークマン、V・バートルド、トマス・アーノルドといった多くの人々の作品に目を通す手間すらかけなかったわけだ。この全員がイスラムの経済活動を扱っている。アーノルドはイギリス人だった。ちなみにロダンソンは、サイド氏の分析や主張の一部を推し進めるなら「二つの科学というジダーノフ主義理論とまるで同じ競技に陥ることになる」という興味深い指摘を行っている⁸。

科学史を研究する人物は、科学そのものの専門家でなくてもよいだろうが、科学の基本についての基礎知識くらいは欲しい。同様に、オリエンタリズム（東洋学）——つまり歴史学者や文献学者の業績——の歴史を研究するなら、少なくともそこで問題になっている歴史や文献学について多少の知識は欲しいものだ。サイド氏は驚くほどの無知を示している。（訳注：ここにあった時代認識やシュレーゲル批判に対する論難は前のほうに移動されている）

⁸ Maxime Rodinson, *La fascination de l'Islam* (Paris, 1980), p. 14. ジダーノフとその後継者たちによる「二つの科学」はイデオロギー的な肩入れ、政治的な目的、科学者たちの社会的あるいは民族的な出自にすら応じていろいろ定義が変わってきた。

サイード氏のアラビア語とイスラムについての知識は驚くほどのギャップを示している。彼が引用している唯一のアラビア語フレーズ (p. 129) は、綴りも翻訳もまちがっているし、サイード氏のページに登場する数少ない他のアラビア語単語も、同様にまちがっている。彼はイスラム神学用語「タウヒード」を「神の超越的な一体性」(p. 269) だと説明するが、実際にはこれは一神教、つまり、神が一つだと宣言または述べることだ。これはアラビア語の語形が示している通りだ。

同じような無頓着ぶりはサイード氏の著作の他の側面にも広がっている。167 ページで彼は、ゲーテからいくつかの詩文をもとのドイツ語で引用して、その英訳を追加しているが、その英訳はとんでもない基礎的なまちがいを含んでいる。「Gottes ist der Orient! / Gottes ist der Okzident!」というのは、サイード氏が思っているらしき「神は東洋である! / 神は西洋である!」などという意味ではなく、「東洋は神のもの/西洋は神のもの」という意味で、つまり西洋も東洋も神のものだ、という意味だ。

サイード氏の調査で無視されているのはドイツ人だけではない。もっと驚くべきことに、彼はロシア人も無視している。彼らの貢献は、かなりのものではあるがドイツ人や、英仏のものにすら劣る。だが別の意味で彼にとってきわめて有用だったはずだ。というのもソ連の学術研究は、特にソヴィエト連邦のイスラム地域やその他非ヨーロッパ地域の扱いにおいて、まさにサイード氏が他人についてあれほど嫌っているような魂胆まみれの見下した書きぶりに——彼が糾弾する英仏の学者などよりはるかに——近いものとなっているからだ。だが奇妙なことにロシア人は、イスラムについての最も侮辱的で偏見に満ちた主張ですら、サイード氏の糾弾からは完全に除外してもらえている。

この見過ごしは、ロシア語を知らないせいではあり得ないだろう。当該言語を知らなくても、他の話についてならサイード氏は平気で語っているのだし、そうでなくても関連するソヴィエトの学術研究のまとめは英語やフランス語で存在しているのだから。その理由の説明となりそうなのは、サイード氏の本が持っている政治的な目的だ。思い出してほしいが、サイードは南イエメンが「中東で唯一のまともな急進的人民の民主主義なのだ⁹」と信じている。こんな記述を額面通りに受け取れる作者は、おそらくムハンマドをシャーマン的な神話にすぎないと考えた研究者 S・P・トルストフや、コーランを奴隷所有支配階級のイデオロギー表明だと述べた E・A・ベリヤーエフ教授ですら、何のお咎めもなく容認してしまうことだろう。

最後に一つ、最も驚くべき点かもしれないのが、サイード氏のアラブその他オリエントに対する態度としてこの本に描かれたものが、彼の糾弾する最も傲慢なヨーロッパ帝国主

⁹ *New York Times Book Review*, October 31, 1976.

ルイス「オリエンタリズムの問題」

義著者よりもはるかに否定的なものだ、ということだ。サイド氏は「アラビア語の本や雑誌（そしてまちがいなく日本語、各種のインド方言などのオリエンタ言語）（後略）について語る。この蔑視に満ちた一覧、特にインド人が話し書くものが言語ではなく方言だという思いこみは、19世紀初頭の地区総督並のものだ。

さらに驚かされるのは、アラブの学術研究や著作に対するサイド氏の無視——あるいは無知だ。「アラブの学者やイスラムの学者は、だれもアメリカやヨーロッパの学術誌や機関、大学で何が起きているかを無視するわけにはいかない。その逆は成り立たない。たとえば、今日のアラブ世界では、主要なアラブ研究誌は存在しないのだ」(p. 323)。最初の文は、非難されるようなことではない。残りはまったく事実ではない。サイド氏はどうやら、アラブ諸国各地の大学や研究所、学会などの学術組織で刊行されている大量の研究誌、モノグラフ、刊行物など各種研究をご存じないようだ¹⁰。また同じく、アラブ社会や文化の欠点や弱点の一部を検討しようとする、アラブ人著者による莫大でいまなお拡大しつつある自己批判文献も知らないようだ。彼らはその自己批判の過程で、サイド氏が東洋学者による指摘（サイド氏が東洋学者たちの抱く人種差別、敵意、支配欲のあらわれだと糾弾するもの）と同じような指摘を自らずっと熾烈な形で行っているのだ。そしてオリエンタリズム/東洋学についてアラブ人著者たちが書いた大量の文献についてすら知らないらしい。少なくともそれに言及はしていない¹¹。

サイド氏の本の不適切さをさらに明確にしているのは、著者が批判的なコメントにまったく対処できないことだ。批判が出てもサイド氏の反応は逆ギレに罵倒、ときにはそこに煙に巻くような物言いが加わる。その一例は、アメリカのマスコミにおけるイラン危機の扱いに関するサイド氏の議論にも見られる。それが『コロンビア・ジャーナリズム・レビュー』に初めて登場したとき、私は編集部に次のような指摘を行った¹²。

「イラン」でサイドは私の著作から短い別々の一節を二つ引用し、それをくっつけて、それがイランでの最近の出来事に関するコメントを内包しているのだという印象を与えています。しかしその二つの節はまったく別の文からのもので、しかも三十年前に出た本のものであり、中世晩期におけるイスラム文明衰退の一部側面に

¹⁰ そうした例としては *Review of the Arab Academy* (ダマスカス), *al-Abhath* (ベイルート)、*Review of Maghribi History* (チュニス)、カイロ、アレキサンドリア、バグダッドなど多くの大学における芸術社会科学部の紀要などがある。

¹¹ たとえば Tibawi and Khatibi の著作、Najib al-Aqiqi のオリエンタリズム/東洋研究と東洋学者に関するアラビア語の3巻本。これはまちがいなくこの対象についての、どんな言語でも最も包括的な研究だ。

¹² *Columbia Journalism Review*, March-April と July-August 1980; *Harper's*, January 1981. 別の例は、サイド氏が *Times Literary Supplement* (London), October 9, November 27, と December 4, 1981 でマルコム・ヤップとやりあったときにも見られる。

ついて語ったものです。サイドがその一節を引用した『ニューヨーク・タイムズ』の記事もそれが現代のイランについてのものだなどと述べてはいないし、またそんな印象を与えてもいません。

これに対するサイドの唯一の回答は、文句があるならフローラ・ルイス（『ニューヨーク・タイムズ』論説の著者）に言え、と言う者だった。「なぜなら彼の著作からのそうした節を使ったのは彼女であり、私ではないからだ」。確かに最初に使ったのはフローラ・ルイスだが、それを誤用したのはサイドなのだ。私は手紙でそう指摘している。だがもしサイドが、オリエンタリストやその著作についての専門性を自称しているくせに新聞論説で本当に誤解してしまったのだとしても、ほとんど同じ記事を『ハーバースマガジン』に再刊し、さらにそれを著書『イスラム報道』に採り入れるときにそのまちがいを繰り返すのは正当化されないはずだ。

この『イスラム報道』はサイド氏の事実軽視の例をたくさん提供してくれる。一つあげればいだろう——プリンストン大学での近東研究の扱いだ。サイド氏によると「プリンストン大学は高名できわめて立派な近東研究プログラムを持っている。最近まで東洋研究学部と呼ばれていたこの学部は、ほとんど半世紀前にフィリップ・ヒッティが創設したものだ。今日、このプログラムの方向性は——他の多くの近東学科と同様——社会科学者や政策科学者に支配されている。古典イスラム・アラブ・ペルシャ文学などはカリキュラムや教授陣で、現代の亀頭経済学政治、歴史、社会学に比べるとあまり重視されていない」(p. 136)

この文章はほとんどあらゆる面でまちがっている。かつての東洋研究学部は1969年（どうみても最近ではない）に二つに別れた。極東研究学部と近東研究学部だ。近東研究学部には教授が15人いるが、その大半は歴史と文学、それも前近代を扱っており、だれ一人「政策科学者」などと呼べる人はいない。「近東研究プログラム」というのは近東専門家と、他の学部で近東に関心を持った学者たちとの連携と協力を確保するための事務機関でしかないのだ。

プリンストン大学のセミナーに関する議論を見ると、サイドはそのセミナー論文はおろか、予定表すら見てもいないようだ。結果としてこのセミナーに関する彼の記述は混乱し、矛盾して、驚くほど不正確だ。だから彼はアフリカの奴隷制に関するセミナーと会議について「アラブイスラム世界からの学者はだれも招かれなかった」(p. 137)と主張する。ところが実は、スーダンからの高名なアラブイスラム歴史学者が、このセミナーの計画者の一人なのだ。彼はプリンストン大学で数ヶ月過ごしてこの会議の準備を行い、その開会講義を行っている。彼も他のイスラム学者たちも、サイドの言う「アフリカのイス

ルイス「オリエンタリズムの問題」

ラム教徒とアラブのイスラム教徒との関係悪化」(p.137)を狙ったプロジェクトなどに参加などしなかっただろう。他の学術活動に関するサイドの扱いもまた、敵対的な動機にこだわって探し回り、同じように事実や証拠や可能性についてすら軽視が見られるのだ。

専門雑誌の書評子のあいだでは圧倒的に不評だったにもかかわらず(ただし奇妙な例外はアメリカの東洋学者たちの本拠機関たるアメリカ東洋学会の *The Journal of the American Oriental Society* だ)、サイド『オリエンタリズム』はかなりの影響力を持ってきた。その成功——それを名誉と考えるか醜聞と考えるかはさておき——は、一方ではアメリカの学術エスタブリッシュメントについて、そして一方ではアラブ世界について、興味深い問題を提起している。

最初のものの方が問題としてはむしろかしいし、それに対しては様々な解決策が提起されている。一部の評論家は、サイドの本が歓迎されているのを見て、それが「アングロサクソンの悪癖 (le vice anglo-saxon)」——マゾヒスト的な鞭打ち待望の表明なのだと思うている。この解釈はフランスではある程度の支持を得た。フランスでは、サイドの本はアメリカほどは評判にならず、『ル・モンド』ですらいささか否定的な書評を載せた。また人によってはその成功が、テキストおよび文献的な学術研究における規律があまりに厳しすぎるせいだと述べる。それが厳しすぎるので、無知でも仕方ないという間接的な容認となり——そしてこの本の支持基盤の大半は無知な人々だし、その相当数は大学にもいるのだ。アラビア学者となるよりは、アラブ愛好家になるほうがずっと手間がかからない。

この本とそれが表明する思想、というか正確には態度が、その SF じみた歴史と語彙的なハンブティ・ダンプティ性にもかかわらず成功してしまったという点は、説明を要するだろう。一つの理由はまちががなく、それが反西洋的だということだ——西洋に対する深い敵意だが、もっと細かく言えば、自由で民主的な西洋に対する敵意だ。というのもドイツは部分的に、そしてロシアは完全にお目こぼしをもらっているからだ。これは西側、特にアメリカでの一部の人々の感情とうまく対応している。そうした人々は、アメリカこそが世界の諸悪の根源だと声高に主張する。その傲慢さとばかばかしさは、その先人たちがアメリカこそあらゆる善の源だと主張したときの態度と寸分変わらない。同様に、『オリエンタリズム』は目下ファッショナブルとされる文学や哲学、政治理論の思想や、それ以上にその言葉づかいを採用することで魅力を得ている。それはアラブ世界のあらゆる複雑な民族的、文化的、宗教的、社会的、経済的な問題を、少数のお手軽で、すぐにそれとわかる悪人どもに対して向けられた、一本調子の恨み辛みに還元してしまおうという、単純化への世界的なニーズに応えるものとなっている。大学の書籍部を眺めた人ならだれでもわかるとおり、複雑な問題の単純化バージョンに対する市場は実に広い。そして西洋の読

者にこれほど魅力的なこの手の単純化こそが、この反東洋学/オリエンタリズムに対する最も深刻な批判をアラブの著者や思想家のあいだに引き起こしている。彼らは、自分たちの社会にとって最高の利益を実現し、その本当の問題を解決するためには、問題をこんなふうにあいまいにしてスケープゴートを見つけてはダメだと考えているのだ。

反東洋学者的な哲学を採用した者の中には、有能な東洋学者たちもいる。彼らはこの分野の技能を身につけている。だがそれ以外の人々は、面倒な泥臭い作業から解放してくれるものとしてこの新しい認識論を歓迎している。人によってはその成功が、テキストおよび文献的な学術研究における規律があまりに厳しすぎるせいだと述べる。東洋研究で身を立てたいと願いつつも、それに失敗したか、あるいはその言語を習得しようとしていない人々にとって、この本は安心感をもたらし、それを正当化さえしてくれるのだ。

中東地域にはいくつか主要言語があるが、すべてむずかしい。一つを除けば——現代トルコ語だ——ローマ字以外の文字を使う。すべてはヨーロッパや北米とちがった文化的伝統で形成されている。そうした言語の習得は実に面倒だ。アラビア語をそここの水準ですら習得するには、ヨーロッパ系言語を複数学ぶのと同じくらいの手間暇がかかるし、ましてアラビア語を流暢に使えるとなると、それですら足りない。だからアラビア語やその他中東言語の研究は、かなり専門特化した分野にどうしてもなってしまう。これまでは、この専門分野に携わる人々は、社会科学や、それほどではないが歴史学の分野を習得するだけの時間も意欲もないのが普通だった。歴史学者は、ほとんどが文献記録に頼って研究をするので、自分の情報源を理解するのに必要なだけ、言語を学んで文献学的な技法を身につける意欲を示してきた。だが地域外の社会学者たちは、必ずしもこの地域の言語を学ぶ手間をかけてこなかった。

当然ながら両方の集団は、自分が持ち合わせていないものをけなす傾向を示してきた。ガチガチの文献学者はもはや絶滅寸前だ。社会、経済、政治、果ては文芸理論が情報源の研究に貢献するだけでなく、それを置きかえるだろうと信じている連中は相変わらず幅を利かせている。その一人は最近、中東史の研究書の書評で、別の文明の歴史を理解しようとする東洋学者たちについて侮蔑的に「むずかしいテキストのチマチマした検討」と評した。簡単なテキストに対する粗雑な検討のほうがいいという明らかな嗜好を示唆するにとどまらず、この表現は反東洋学が救いをもたらしている深遠なニーズをよく表している。目下ファッションブルとされる認識論的な見方では、絶対的な真実が存在しないか、到達できない。よって、真実などどうでもいい事実などどうでもいい。あらゆる言説は権力関係の表明であり、あらゆる知識は歪んでいる。従って、正確さなどどうでもいいし、証拠もどうでもいい。唯一どうでもよくないのは、知識利用者の態度——その動機や魂胆だ。そしてその動機や魂胆は、自分があっさり表明するか、他人に勝手に押しつけければいい。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

動機を他人に押しつけるにあたり、真実、事実、証拠、はてはもっともらしさすらどうでもいいというのは、大いに役立つ。単にそう主張すればいいだけだからだ。同じルールが、自分の動機を主張するときにもあてはまる。適切な政治的指示により、善意がすばやく簡単に示されるというわけだ。これは『オリエンタリズム』で明らかに示される。そこでは、どんな学術的な手法面でも手順の面でも他の学者とまったく区別がつかない学者たちが、アラブの大義を支持するかしないかによって、いい連中とダメな連中に仕分けされる。そうした大義の支持は、特に承認された文芸理論や社会理論に裏打ちされていれば、言語や歴史の知識の欠如を補って余りあるものとなる。

こんな見方をしている人々には、こうした態度がアラブ人や非西洋人たちにとって、極度に侮蔑的だとは思いつかないようだ。だってフランス語を知らずにフランスについて、ドイツ語を知らずにドイツについて、果てはスウェーデン語を知らずにスウェーデンについて、だれもまともな学術研究などできるはずがないではないか？ あるいは、そういう言語を学ぼうという活動が一般に敵対的な動機によるものだなどと、だれが言えるだろうか？

もっと不思議なのはアラブ世界についての問題だ。

反東洋学/オリエンタリズムについてのアラブ世界での反応は、最終的には、もっと興味深く重要な別の問題を提起している。

ヨーロッパやアメリカの東洋学者/オリエンタリストたちは、アジア各地の文化すべてを研究してきた——中国に日本、インドとインドネシアなどだ。そして中東でも彼らの研究はアラブだけに限られてはおらず、トルコやペルシャや、その地域の古代文化も含んでいる。こうした他の人々のほぼすべてにおいて、外部から自分を研究する学者たちに向ける態度には、過激なほど、いや完全なといっていいくらいのちがいが見られる。中国人、インド人などは、必ずしも自分たちを研究する東洋学者/オリエンタリストたちに感心してばかりいるわけではない。ときにはあっさり無視するし、ときには寛容さをもっておもしろがり、ときにはギリシャの学者がヘレニストを受け入れたのと同じような形で容認した。東洋学者に対する暴力的で罵倒に満ちた攻撃は——他の宗教からの脅威だと思ったときのイスラム教徒の反応を除けば——東洋学者たちが研究してきた一つの集団、たった一つの集団に限られている。それがアラブ人だ。これはアラブ人が、他のアジアやアフリカの人々と大きくちがっているのだろうか、それともアラブ専門家たちが他の東洋学者たちと大きくちがっているのか、という問題を引き起こす。

この問題に答えるには、別の重要な事実を見ると役立つかもしれない——東洋学者へのこうした敵意はアラブ諸国ですら決して普遍的ではないどころか、支配的ではないという事実だ。サイド的および関連学派により最も暴力的な攻撃を受けた東洋学者の多く

は、何世代ものアラブ人学生を教えてきたし、アラブ諸国でも翻訳され本が出ている¹³。一般に、アラブ圏の大学における真面目な学者たちは、東洋学者の刊行物を平気で読み、利用し、東洋学者の国際的な集まりにすら参加している。オリエンタリスト/東洋学者たちが活動してきた各種分野——歴史、文学、言語、哲学など——は東洋学者の刊行物を普通に使ってきた。東洋学者たちの専門誌にもたくさん投稿しているし、東洋学者のシンポジウム、集会などの国際活動にも普通に参加している。アラブ人学者はしばしば、東洋学者たちとはちがった結果や判断を下す。だがそれは、アラブ人学者たちのあいだにも意見の相違があり、東洋学者たちのあいだでも意見の相違があるのと同じだ。そうした相違はおおむね学術的な見解の相違で、民族的、イデオロギー的な党派の衝突ではなく、学術的な論争と礼儀の範囲内で議論されている。オリエンタリスト/東洋学者たちに対する糾弾の声をあげたのは、彼らの研究に興味があり、それを評価するだけの能力をもった学者仲間ではなく、まったく別の場所からの人々だ。

重要な点として、東洋学者への批判はアラブ人著者たちから、強力な反論を引き起こすことになり、それはますます強まっている。彼らは西洋文明に対する幻滅と西洋がアガブの土地で行ったことに対する遺恨という面で、反オリエンタリストたちとかなり共通しているが、こうしたアラブ人著者たちはアラブ世界が苦しめられてきた災厄や、いまなお直面する課題について、こうした批判者が提示する、尊大で自己満足的で、おめでたいほど単純な説明に呆れ果てている。エジプト人哲学者フアード・ザカリアは見事な論説で、反オリエンタリストたちを二種類に分類している。批判の第一派は、宗教的で弁解済みであり、イスラムの統一性と完全性を、彼らが敵対勢力からの攻撃と見なすものから守ろうとする。そうした敵対勢力としては、キリスト教徒、宣教師たち、ユダヤ人、マルクス主義者、無神論者などがいて、自分たちの信仰をおしつけるべく、イスラムを貶めて信用をなくそうとしている。ほとんどの場合、こうした批判者たちは東洋学者たちが書くときに使う用語を知らないので、引用やわずかな翻訳に頼るしかない。もっと重要な点として、西洋東洋学が属している近代的な批判学術研究についてまったく理解しておらず、したがって現代の西側学者たちが、自分自身の宗教文化的な伝統の分析においても同じくらいかそれ以上に容赦ないのだ、ということを知るで知らない。

第二派の批判者たちは、ザカリア教授によれば、東洋学/オリエンタリズムを宗教的な観点からではなく、政治文化的な観点から攻撃する。実際、その中で最も声の大きい人々はイスラム教徒などではなく、キリスト教徒かポストキリスト教の、西欧やアメリカに住

¹³ 卑近な例ながら申し上げれば、この私ですら六冊何冊かの本がアラブ世界で翻訳刊行されている七、その一冊はイスラム同朋団の下で出ている——エジプト、レバノン、リビア、サウジアラビア、アルジェリア、イラクなどだ。中には、サイード氏反東洋学者たちが強烈に非難したものも含まれている。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

む在外人たちだ。彼らは現代西洋の世俗文明や、その学術文化やそこでの用語を熟知している。この意味で彼らは東洋学者に対し、その学者たち自身の武器で戦いを仕掛けられる。だが彼らには深刻な弱点がある——ほとんどの人が、自分たちが擁護していると主張する古典アラブ文明やイスラム文明についての知識が乏しいことだ。この点で彼らは、イスラム弁明者たちに比べても劣るし、さらに当の東洋学者たちに比べても不利な立場にある。イスラム擁護者たちは、西洋のことをまったく知らずに西洋についておめでたい本質主義的な見方をしているが、アラブの政治文化遺産の西洋化した擁護者たちは過去におけるその遺産の現実と、それを受けついだ人々の直面している課題について、同じくらいおめでたい本質主義的な見方しか持っていない。反オリエンタリストたちが提供する妄想は、真面目な改善努力すべてに先立たねばならない、冷徹な批判的自已分析を遅らせたり邪魔したりすることで、その課題を悪化させるだけなのだ。

反オリエンタリズムの手法や行動様式をかなり詳細に検討してから、ザカリア教授は東洋学者/オリエンタリストたちと、その2種類の批判者たちについて、その動機を精神社会的な分析で論説を終えている。彼が「西洋化した在外人」と呼ぶ人々については、彼は興味深い追加の動機を指摘する——自尊心と新たな隣人たちからの敬意を求める中で、自分の出身文化の業績を最大化して、それを新たな故郷と区別するちがいを最小化して見せようという、移民の自然な欲望だ。

この洞察は、サイード氏自身の主張に裏付けられているようだ。彼は1977年PBSの論争で、14世紀にわたるイスラムの伝統と文明は、今日のアラブ世界にとって大した意味を持っていないという。それは7世紀ヨーロッパの出来事が、現代のアメリカを理解するのに意味がないのと同じことなのだそう。イラクとイランの専門家は、これにまったく賛成できないようだ。ほんの数年後に、イランとイラクは戦争を始め、そのときに相手を貶めるプロパガンダの中でどちらも毎日のように、7世紀の出来事や人物を引き合いに出しており、相手がそれを理解することをまったく疑問視していなかった。アメリカで権力を握ろうとする者が、アングロサクソンの七王国だの、カロリング王朝の台頭だの、ロンバルド戦争だのをサッと持ち出して論点を補強したりするところにはなかなかお目にかかれない。

ザカリア教授の結びの言葉は特筆に値する。

東洋学/オリエンタリズムはもちろんまったく汚点がないわけではないが、もっと大きな危険は、他人が何か非客観的な理由で擁護してみせるからというだけでアラブ人が自らの欠点を否定してしまうことだ。この段階での我々の文化的任務は、後進性に正面切って立ち向かい、まずは自分自身を批判することだ。他人が我々につい

て抱くイメージを、それが意図的に歪曲されたものであっても批判するなどというのは後回しにせねばならない。

東洋学/オリエンタリズム批判は、いくつか正当な疑問を提起するものではある。何人かの批判者が挙げた論点は、こうした研究における導きの原理が「知は権力である」という格言で表現されているということで、東洋学者/オリエンタリストたちが東洋の人々についての知識を探していたのは、彼らを支配するためだという。そのほとんどは帝国主義に直接、あるいはアブデル＝マレクが述べるように客観的（マルクス主義的な意味で）に奉仕していたのだ、と。もちろん一部の東洋学者は、主観的にも客観的にも、帝国支配に奉仕したり、そこから恩恵を受けたりしただろう。だが東洋学者の活動全体の説明としては、これはばかばかしいほど不十分だ。知識を通じた権力追求が、唯一あるいは主要な動機だったなら、なぜヨーロッパにおけるアラビア語とイスラムの研究は、イスラム征服者たちがヨーロッパの東部と西部から追われてヨーロッパ人たちが反撃に転じる何世紀も前に始まったのだろうか？なぜこうした研究は、アラブ世界支配にまったく関与していないヨーロッパ諸国で開花し、しかもそうした国がイギリスやフランスと同じくらい（ほとんどの学者はそれより大きかったというだろう）貢献をしたのか？そして西洋の学者はなぜ、自国でとっくに忘れ去られていた記念碑の解説と回復にあれほどの努力を注いだのだろうか？

東洋学者/オリエンタリストたちに向けられる別の非難は、研究対象の人々に対して偏見があるというもので、中にはそもそも敵意がこめられているとすら言う人もいる。もちろん学者といえど、他の人間と同じく、何らかの偏りはあるだろう。ただし通常は研究対象については、悪意よりは好意的な偏りのほうが多いだろうが。だが、自分の偏見を認識してそれを修正しようとするのか、それともそれをまったく抑えようとししないのか、といううちがうこそが重要なのだ（文化的な偏向や政治的な魂胆の糾弾はまた、そうした糾弾を行う人々が自分にもそうした批判を向けて、ロシア人たちをまとめて容認するようなことをしなければ、多少は説得力も持つはずだ）。

偏見の問題を超えて、ある社会の学者が、別の社会の創造物をどこまで研究誌解釈できるのか、というもっと大きな認識論的問題はある。糾弾者たちはステレオタイプや表層的な一般化を糾弾する。ステレオタイプ化した偏見は確かに存在する——東洋その他を問わず、他の文化に対してのみならず、他の国、人種、信仰、階級、職業、世代、その他自分自身の社会の中でも何か集団について言及しようとするれば、そうした偏見は出てくるだろう。東洋学者/オリエンタリストたちはこうした危険から逃れられているわけではない。

ルイス「オリエンタリズムの問題」

その糾弾者たちもまた同じだ。そして少なくとも前者は、知的な精度や規律への配慮という優位性を持っている。

最も重要な問題——現在の批判の波ではまったく言及されないもの——は、東洋学の知見が持つ学術的な意義、いや学術的な有効性についてだ。サイード氏はかしこくも、この問題にほとんど触れておらず、学者たちの態度だの動機だの魂胆だのを本の主題としつつ、そうした学者たちの研究にはまるで注意を払わない。東洋学者/オリエンタリストの学術研究に対する学術的な批判は、学術研究プロセスにおいては正当なもので、むしろ必要かつ本質的な一部だ。ありがたいことに、そうした批判は常に継続している——オリエンタリズムの批判ではない。そんなものは無意味だ。個別の学者や学派の研究やその結果に対する批判だ。東洋学者/オリエンタリストの学術研究に対する最もしっかりした鋭い批判は、これまでもこれからも、東洋学者たち自らによるものであり続けるだろう。